

川 奥

かわ おく



米ノ川地区とともに米奥を構成する川奥地区は、米ノ川地区から、四万十川の西岸に沿って走る県道322号を少し南に行ったところから西に入った集落である。

川奥地区に入ってほどなく、右手に白河神社がある。この白河神社は、米ノ川地区にあった河内神社と、川奥地区にあった白皇神社を合祀してきた神社で、両地区にとっての氏神さまである。

川奥といえは、県指定無形文化財の花取り踊りである。この花取り踊りは、獣害に苦しむ農民たちが、山の神に祈願するために踊り始めたものと伝えられている。この川奥という地区は、その背後にそびえる枝折山から流れ出る水によって、早くから農地として開墾されていた。南北朝時代に、南部氏が奥州からこの地にやって来た時には、すでに一定の生産活動がなされていたと思われる。この地域は谷間にあるため、獣害もかなりのものであったようで、戦国期になって、農民たちは、とうとうこの獣害対策を、当時の「お殿様」に願い出ることになる。

戦国期にこの地を支配していたのは、仁井田五人衆の西氏であるとされている。その西氏と友好関係のあった、五人衆の中で最大の勢力を



河内神社と白皇神社を合祀した白河神社

誇る窪川氏の当主に対して、川奥地区の農民たちが、それまで慢性化していた獣害被害への対策を陳情したのである。当主は、その願いに応えるため、たびたび猪狩りや鹿狩りを実施。おかげで、積年の悩みであった地区の獣害は劇的に減少したという。地区の農民たちはこのことにたいへん喜び、当主である殿様を招いて、感謝の花取り踊りを踊ったという。一説では、これが現在の花取り踊りの起源ともいわれているが、それよりもずっと昔から続いていたという説も有力であり、確かなことはわからない。

川奥の花取り踊りは、大太刀を持った踊り子が鳥毛を、小太刀を持った踊り子が烏帽子をかぶって、袴姿で輪になって踊る。数年前までは、山の中腹にある祠で、踊りが奉納されていたが、現在では、麓の集会所に祠を移し、そこで伝統の踊りが継承されている。川奥には、現在、30世帯、65人が暮らしている。

町のうごき

| (1月31日) | 人口 | 前月比 | 出生 | 死亡 | 転入 | 転出 |
|---------|--------|-----|-----------|----|----|----|
| 男 | 8,271 | -8 | 男 4 | 20 | 14 | 6 |
| 女 | 9,233 | -14 | 女 4 | 21 | 17 | 14 |
| 計 | 17,504 | -22 | 計 8 | 41 | 31 | 20 |
| 世帯数 | 8,562 | -12 | (1月中旬の届出) | | | |

窪川地域 12,320人 大正地域 2,481人 十和地域 2,703人

四万十川の水質状況

| | 適正值(mg/l) | 2月6日 |
|----------|-----------|--------|
| リン酸 | ≤ 1.0 | 測定範囲以下 |
| 硝酸 | ≤ 0.5 | 0.369 |
| アンモニウム | ≤ 5.0 | 測定範囲以下 |
| アニオン活性剤 | ≤ 1.0 | 0.05 |
| 化学的酸素要求量 | ≤ 10.0 | 測定範囲以下 |

調査：大正（吾川）
資料：四万十高校自然環境部